

四国大学紀要, (A)43: 1-11, 2014
Bull. Shikoku Univ. (A)43: 1-11, 2014

自尊感情を育む保育における留意点及び指標

勝 浦 美 和

The Importance of Self-Esteem in Childcare

Miwa KATSUURA

ABSTRACT

It is important to raise children's fundamental self-esteem, which is the feeling of unconditional acceptance. The early stages of life are character forming. Kindergartens and nursery schools are the first places that young children experience group life. The role of child-care workers is extremely important. Child-care workers need to intentionally raise the self-esteem of young children. This research paper, which is a continuation of previous work, examines the teaching procedures of five-year-old children that will improve self-esteem. It also proposes and index to measure this.

KEYWORDS: child-care workers, self-esteem, index

I 問題の所在と目的

幼児期は、人間の人格形成の基礎がなされる大切な時期であると言われている。しかし、昨今の子どもを取り巻く環境は厳しく、核家族化や少子化、地域の教育力の低下などから人間関係が希薄になり、実体験から学ぶ機会が減少していると考えられる。保育・教育現場においても自信がなく、自分で考えて主体的に行動することが苦手な子どもたちが多くみられるようになり、平成20年度の教育要領改訂の際には、コミュニケーション能力の不足や、生きる力の乏しさが問題点として挙げられている。また、今後、社会情勢はより悪化することも考えられ、たくましく未来を生き抜く子どもの育成が課題とされている。

幼稚園教育要領第1章第1節幼稚園教育の基本においても「教育は子どもの望ましい発達を期待し、子どもの潜在的な可能性に働き掛け、その人格の形成を図る営みである。特に、幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要な役割を担っている。」¹⁾とある。また、「幼児一人一人の潜在的な可能性は、日々の生活の中で出会う環境によって開かれ、環境との相互作用を通して具現化されていく。」²⁾とあるように幼児は環境との相互作用の中で、

体験を深めながらその心を揺り動かし、人格を形成していくと言える。中間(2007)は、「自らが働きかけることによって周囲が応答してくれるという経験は、子どものコンピテンス(生活体がその環境と効果的に交渉する能力、および交渉における有能さを追求しようとする傾向)を育てる基礎と考えられているが、コンピテンスは成功体験と密接に結びついており、日常生活で繰り返される一つ一つの経験が、自分がコンピテントであるという感覚を支える経験となる。その感覚を確かなものにするのは、他者からの賞賛や承認、励まし、評価、共感であり、このコンピテンスの感覚は自尊感情を支え、さらに自分が自信をもって行動するための心理的基盤となる。つまり、自尊感情は、肯定的な過去を刻む役割とともに、肯定的な未来へと自分をつなぐ役割も果たす。」³⁾としている。このことから、幼児の人格形成に携わる保育者が意識的に子どもの自尊感情を育もうとすることの重要性が窺える。

自尊感情について、近藤(2007)は、「社会的自尊感情」と「基本的自尊感情」に着目し、それらをバランスよく育てることが重要であると説いている。「社会的自尊感情とは、向上心の下支えとして重要な感情、基本的自尊感情とは、自尊感情の基礎、いわば絶対的、無条件に自らの存在を認める感情、自

分は生まれてきてよかったという感情である。」⁴⁾としている。近藤によると、「社会的自尊感情は他者との比較によって形成されるものであり、上限がなく、ほとんどの子どもたちはいつか敗者となる。社会的自尊感情がつぶれてしまったときに彼らを支えるのが基本的自尊感情であり、この基本的自尊感情の上に、社会的自尊感情がのっているというのが、自尊感情の構造である。」⁵⁾としている。つまり、挫折や葛藤を感じた時に自己を支え、前向きに次の段階に進もうとする力となるのが、基本的自尊感情ということになる。

また、園田（2007）は自尊感情を、「自分に対する肯定的な感情、自分についてそれなりの能力とよい面をもった大切な存在とする感覚」⁶⁾とし、「その感覚が一時的であったり、浮遊的であったりするのではなく、個人の中にある程度、安定して存在しているというところに自尊感情の特徴がある。」⁷⁾と述べている。「ゆえに自尊感情は子どもに対して大人があだ花的に促成栽培しうるものではなく、一方的に外から注入しうるものでもない。自尊感情は、家庭で、学校で、友達関係を通して、また社会の中でじっくりと人と人との肯定的な関わり体験を基盤にしながら醸成していくことが不可欠となり、その際に、かかわる大人自身にまずは自尊感情が内在していること、また大人も子どもとのかかわりを通して、さらに自己の自尊感情を育てていくといったような共有の姿勢が必要条件となる。」⁸⁾としている。これらのことから、人格を形成していく最初の段階である幼児期において必要なのは、基礎的な自尊感情をしっかりと育てていくことであると考ええる。無条件に自分の存在を認める感情、自分は生まれてきてよかったという感情は、自己受容、自己肯定感とも呼ばれるが、その感情を日々の生活やかかわりの中でしっかりと定着させていくことが、現在の子どもに求められている生きる力の基礎となるのではないだろうか。幼稚園、保育所はほとんどの子どもにとって、集団生活を体験する初めての場所である。子どもが、家庭を抜け出し、様々な人とかかわりを体験する場所において、その心身の成長発達を預かる保育者の役割は大きい。保育者が意識的に幼児の自

尊感情を育てていこうとすることで、その育ちを確かなものとできると考えられる。そこで、本研究では、幼児の自尊感情を育むために保育者に必要であると思われる留意点と、幼児の自尊感情の育ちを知るために必要となる指標について、先行研究及び幼稚園教育要領解説、幼稚園5歳児の実践事例より抽出する。

Ⅱ 方法

対象児：幼稚園5歳児27名（男児14名 女児13名）

対象児については、保護者に口頭で研究の主旨と個人が特定されないように配慮することを説明し、承諾を得た。

方 法：幼児の自尊感情を育むために保育者に必要であると思われる留意点と幼児の自尊感情の育ちを知るために必要となる指標について、先行研究及び幼稚園教育要領解説、幼稚園5歳児の実践事例より抽出する。事例は全て仮名とする。また、幼稚園教育要領解説引用部分では教師という言葉が使用されているが、引用以外では保育者をこれと同義で用いることとする。

Ⅲ 結果と考察

1 自尊感情を育む保育における留意点について

近藤（2010）は、その著書の中で「基本的自尊感情は、極めて幼い頃の親あるいは親に代わる養育者との関係で成立する愛情関係を支えとし、さらに、そうした経験を積んだ後で、あるいは積みながら、身近な信頼できる人々との共有体験を重ねていくことで、より強固に形成されていくと考えられる。」⁹⁾としている。集団生活の中で、保育者は幼児にとって身近な信頼できる人として、ありのままの幼児を愛し、幼児自身がありのままの自分を愛せるよう支えていく必要がある。園田（2007）は、自尊感情を育てる際に「かかわる大人自身にまずは自尊感情が内在していること、また大人も子どもとのかかわりを通して、さらに自己の自尊感情を育てていくと

いったような共有の姿勢が必要条件となる¹⁰⁾としている。ありのままの自分でよいという基本的自尊感情を保育者になる時点で内在させていることは難しい場合もあると思われるが、幼児とのかかわりの中で自己の自尊感情を育てていこうとすることは可能であると考え。このことから、「幼児の自尊感情を育てていくためには、それにかかわる周囲の大人が自尊感情をもつことが必要であるということを知り、自分自身の自尊感情を大切にす。」を留意点①とする。

また、入園、進級当初は、新しい環境に戸惑いを感じたり、保護者と離れることに不安を感じたりする子どもが多い。まず、保育者との信頼関係を築くことができるよう笑顔で接することやスキンシップを心がけ、幼児が自分の幼稚園や学級を好きになれるようにすることが必要である。幼稚園教育要領解説第3章一般的な留意事項においても「入園当初において、自分の好きなものにかかわって過ごすことによって新しい生活の中で安定感をもつようになる。さらに、その安定感をもつことによって、周囲の環境に対して興味や関心をもってかかわるようになり、いろいろな遊びを知っていく。」¹¹⁾「家庭のように安心できる雰囲気のある保育室の環境をつくる」¹²⁾と述べられている。幼児の興味、関心に訴えかけながら、ありのままの自分を出し、笑ったり泣いたり怒ったりすることができるような学級づくりを心がけ、一人一人の幼児が、自分の学級を安心して過ごせる自分の居場所であると感じることができるようにしていくため「幼児が居場所を感じ、ありのままの自分を出すことができるような学級の雰囲気づくりをする。」を留意点②とする。

幼稚園教育要領解説第3章一般的な留意事項には次のようなことも述べられている。「一人一人のその幼児らしい姿を教師が受け止め、きめ細かくかかわることによって、幼児は安心して自分を表出できるようになり、次第に周りにいる他の幼児の存在に気付き、かかわりがもてるようになっていき、幼児は充実した幼稚園生活が送れるようになっていく。したがって、幼児の行動や内面を理解する教師の役割は極めて重要である。」¹³⁾この言葉からも分かるよ

うに、保育者は日々の活動の中から一人一人の「その幼児らしい姿」を受け止めることに力を尽くさなくてはならない。「その幼児らしい姿」とは、幼児一人一人における活動の過程、頑張りの過程であると考え。幼児がどのようなことに興味や関心を持ち、時間や心を注いでいるかに目を向け、一人一人のその幼児らしさである活動の過程を認めていくため、「結果だけではなく、幼児一人一人の活動の過程を認めていく。」を留意点③とする。

幼稚園教育要領人間関係内容解説に「教師は幼児の行動や思いをありのまま認め、期待をもって見守りながら幼児の心の動きに沿って、幼児に伝わるように教師の気持ちや考えを素直に言葉や行動、表情などで表現していくことが必要である。」¹⁴⁾とある。日々の幼児とのかかわりの中で、一人一人の幼児について、成長を感じたり、感謝や感動を感じたりすることがよくある。そのことを事務的に記録するだけでなく、その都度、幼児に言葉にして伝えていくことで、幼児自身も自分の成長に気付いたり、自分の発した言葉や態度が人にどのような思いを与えるのかを確認したりしていくことができるのではないかと考える。そのため、「幼児と接する際には、ありのままの幼児の姿を受け止め、幼児の心の動きに沿った言葉かけを大切にす。」を留意点④とする。

「保育者と子どものスキンシップと両者と人間関係との関連」について、塚崎、無藤(2004)は、「保育者と子どもは、初めて出会った時から、抱いたり、抱かれたり、手を繋ぐといった親和的なスキンシップを通して親しい関係を成立させる。このことから、たとえ大人と子ども、保育者と園児という関係であっても、その関わりはからだを持ったもの同士の関係であり、同じ場所において表情やからだの所作を共有することが人間関係の基本である。保育におけるスキンシップは、子どもと保育者、さらに子ども同士の関係を繋ぐ重要な機能を果たしていると言える。」¹⁵⁾と述べている。このように日々のかかわりの中で幼児とのスキンシップをとっていくことは信頼関係を繋ぐ上で重要な働きをしていると考えるが、幼児の育ってきた環境により、甘えることが苦手で、どのようにスキンシップをとればよいのか分からない

い幼児もいる。そのため、保育者は幼児の様々な生活場面において意図的にスキンシップをとることができる場面をつくっていく必要があると考える。そこで、「生活の中に抱きしめる場面をつくり、一人一人とのスキンシップを欠かさずにとる。」を留意点⑤とする。

2 自尊感情を育む保育における指標について

幼稚園では適切な教育課程を編成、実施するうえでの参考資料として文部科学省から出された幼稚園教育要領を用いている。幼稚園教育要領では、幼児期の特性や発達をふまえ、環境を通じた教育を行うことを目的としており、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5つの領域から目指すべき幼児の姿がねらいと内容に表されている。

幼稚園教育要領解説「健康」に「生涯を通じて健康で安全な生活を営む基盤は、幼児期に愛情に支えられた安全な環境の下で、心と体を十分に働かせて生活することによって培われていくものである。健康な幼児を育てることとは、単に身体を健康な状態に保つということを目指すことではなく、他者との信頼関係の下で情緒が安定し、その幼児なりに伸び伸びと自分のやりたいことに向かって取り組めるようにすることである。幼稚園においては、一人一人の幼児が教師や他の幼児などとの温かい触れ合いの中で楽しい生活を展開することや自己を十分に発揮して伸び伸びと行動することを通して充実感や満足感を味わうようにすることが大切である。明るく伸び伸びということは、単に行動や言葉などの表面的な活発さを意味するものだけではなく、幼稚園の生活の中で解放感を感じつつ、能動的に環境とかかわり、自己を表出しながら生きる喜びを味わうという内面の充実をも意味するものであり、自己充実に深くかかわるものである。」¹⁶⁾とある。

近藤（2007）は、「子どもたちが様々な感情を友達や先生と共有することにより、基本的自尊感情はより確かなものとなる。」¹⁷⁾としている。「具体的には、身近な様々な場面で生じる多様な感情を共有する機会をつくり、楽しい場面、苦しい場面、辛い場面などを授業や特別活動など、日々の学校生活に無

数に転がっている機会を通し、肩を並べて、そうした心地よさや苦しさを感じ合ったり、語り合ったりすることが、基本的自尊感情を強めることに役立つ」¹⁸⁾としている。これは、幼稚園での環境を通して行われる生活に通じるものであり、幼稚園教育要領の指す「生涯を通じて健康で安全な生活を営む基盤」とは、自尊感情を指すものであると考える。そこで、自尊感情が育まれることで見られるようになると思われる幼児の姿、また、そのような姿を目指すことで、自尊感情が育まれていくであろう幼児の姿を幼稚園教育要領より探り、指標とする。

1) 6月13日「がんばれ」

数日雨が続き、外遊びを我慢していた子どもたち。「少しでも外に出たい」と言うので、雨の合間に園内遊具を一回りする。木の橋まで来るとサチは立ち止まった。木の端っこに上がるが、怖くて前に進めない。後ろにコウタが待っていると思うと緊張してか、橋から落ちてしまった。もう一度上がろうとしたサチの傍をコウタがものすごいスピードで走って渡っていく。「そんなん、悲しい気持ちができる」と保育者が言うとコウタは「しまった」というような顔をし、他児もじっとその様子を見ていた。「緊張したら行けん時もあるよな。そんな時は私が手伝いながら行くからね」と子どもたちに声をかけた。保育者が手をつなぎ、支えになるとサチは一步踏み出した。怖いので少しずつしか進めないサチの姿を全員がじっと見ている。サチは余計に緊張して固くなる様子だった。するとハルカが「がんばれ」とサチに声をかけた。保育者が「嬉しいなあ。がんばれって言ってくれたら元気が出る」と言うと、他児も「がんばれ」と口々に言う。サチが無事、木の橋を渡り終えたので「みんな、応援ありがとう。サチちゃん、ようがんばったね。嬉しいね」と声をかけた。先に渡ったコウタも少し安心したような表情になった。

保育者や友達との触れ合いの中で、「できないかもしれない」と固まっていたサチが橋を渡ることができた。保育者の支えや友達から応援してもらえた嬉しさが力となり、ありのままの自分を受け入れながら活動を楽しむことができたのではないかと考える。

領域「健康」内容より

① 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。

「幼児は周囲の大人から受け止められ、見守られているという安心感を得ると、活動への意欲が高まり、行動範囲も広がっていく。幼児が安定感をもって行動し、生き生きと活動に取り組むようになるためには、幼稚園生活の様々な場面で、幼児が自分は受け止められているという確かな思いをもつことが大切である。」¹⁹⁾とある。その確かな思いは、「自分は自分のままでよい」という基本的自尊感情に繋がると考える。

② 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。

「心と体の発達を調和的に促すためには、特定の活動に偏ることなく、様々な活動に親しみ、それらを楽しむことで心や体を十分に動かすことが必要である。そのためには、幼児の発想や興味を大切に自分で自分から様々な活動に楽しんで取り組むようにすることが大切である」²⁰⁾とある。幼児が自分から様々な活動に楽しんで取り組もうとするためには、「やってみよう」「やってみたらきっと楽しい」という意欲をもつことが大切である。しかし、「できないかもしれない」という不安感から取り組むこと自体を避けようとする子どもも少なくない。できるかできないかを心配するのではなく、まずやってみる意欲をもつためには、「失敗するかもしれない自分」を受容する自尊感情が必要である。ありのままの自分を受け入れるようになることで、様々な活動に親しみ、楽しんで取り組むようになるのではないかと考える。

2) 5月18日「だって、できると嬉しいもん」

ハナが登り棒をしようと頑張っていた。靴下を脱いで、滑りにくくしながら少しでも上に登ろうと練習している。下から50センチぐらいまで登ると「こわいよ。もう登れない」と言うので、保育者が手で足場を作り、声をかけながらサポートするようにした。下で見ていたトモコも「がんばれ」と応援する。足場ができたこと、保育者がすぐ側にいることで安心したのか、ぐんぐんと上まで登っていった。近くにいた幼児からも「うわあ。すごい」と歓声が上がった。降りてきたハナは満足そうに「私、これから3回も5回もするよ。だっておもしろいもん」と笑顔で言った。「私も上まで行ってみたい。先生、やって」とトモコが言い、保育者が足場を作ると「登れる。登れる」とハナの顔を見ながら上がっていった。

次の日、登り棒に数人が集まっている様子が見えたので保育者が近付いてみると、ハナとトモコが2人がかりで足場を作り、「いけるよ。ここに足を置いてみて」と必死の表情でケイタを励ましている。保育者を見ると「先生、やって。うまくできん」と助けを求めてきた。「すごいなあ。2人で協力して足を置くところを作ってたんやな」と言うのと「だって、できると嬉しいもん」とのことだった。「ありがとう」と言葉をかけ、保育者が足場を作ると、ハナ、トモコはケイタに向かい笑顔で「よかったね。ここに足を置くんよ」「こわくないよ」と話しかけ励ました。

保育者の援助や友達の応援により、やり遂げようとする気持ちを持ち、上まで登ることができた。ハナの「私、これから3回も5回もするよ」という言葉からはやり遂げた嬉しさが感じられる。また、自分の嬉しさをケイタにも味わわせようとしたことから、やり遂げた達成感が自信となり、次の意欲に繋がっていることが窺える。

領域「人間関係」内容より

③ 自分で考え、自分で行動する。

「生活の様々な場面で自分なりに考えて自分の力でやってみようとする態度を育てることは、生きる力を身に付け、自らの生活を確立していく上で大切である。そのためには、まず自分がやりたいことをもち、自分から興味や関心をもって環境にかかわり、活動を生み出すことが大切である。さらに、その活動を楽しみながら展開し、充実感や満足感を味わう中で、次第に目当てをもったり、自分の思いが実現するように工夫したりして、そのような課題を自分で乗り越えることが大切である。」^[21]とある。しかし、自ら活動を生み出すことは容易ではない。保育者の環境構成も大切であるが、まずは、子どもの情緒の安定を図ることが必要である。学級や園に自分の居場所を感じ、安心して過ごせる環境の中で失敗しても大丈夫という経験を重ねることで、次第に自分から環境にかかわり、考えたり行動したりできるようになると考える。また、自分から環境にかかわり、試行錯誤や充実感、満足感を味わいながら課題を乗り越えていくことは、一人一人の子どもの自信となり自尊感情を育んでいくと考える。

④ いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。

「幼児は、幼稚園生活の中で様々な環境に触れ、興味や関心をもってかかわり、いろいろな遊びを生み出す。この遊びを持続し発展させ、遊び込むことができれば、幼児は楽しさや達成感を味わい、次の活動に取り組んだ際にもやり遂げようとする気持ちをもつようになる。しかし、幼児は、興味や目当てをもって遊びを始めても、途中でうまくいかなくなったり、やり続ける気持ちがなくなって止めてしまったりすることがある。このようなとき、幼児は、信頼する教師に温かく見守られ、支えられていると感じることができ、必要に応じて適切な援助を受けることができれば、あきらめずにやり遂げることができる。」^[22]とある。つまり、子どもは保育者によって支えられ、失敗するかもしれない自分と向き合いながら、遊び込む中で生まれる試行錯誤や葛藤を乗り越えることで物事を最後までやり遂げることがで

きるようになると考える。

3) 10月29日「砂を運ぼう」

サツマイモを収穫した後、砂の後始末をしていると5歳児が手伝いに来た。「重たいけん、年少さんはかわいそうやろう」「年長さんやけんできる」など、自信をもって取り組もうとする姿が見られた。トモヤは「この砂袋一人で運べる」と持とうとするが、重たくて動かない。「あかん。助けて」と近くにいたコウキを呼び、男児数人で園庭の隅まで運ぶようにする。「いくよ。ちゃんと持ってよ」「わっしょい！わっしょい！」「1回休もう」「リヤカーにのせてみたら？」と声をかけたり、いろいろな方法を試したりしながら砂を運んだ。「やった」「疲れたなあ」「でも、まだいっぱいあるよ」「もう1回行く？」と何回も砂を運ぶ。いくつものグループが何回も移動し、砂を運び終えると「全部いけたなあ」「ほくらがやったんよな」と満足そうな声が聞かれた。活動を終えた後、他の保育者や4歳児に「今日は砂袋を10個も運んだよ」「しんどかったけどがんばった」と得意そうに話す姿が見られた。また、降園時にも収穫したサツマイモのことで併せて「砂の後始末な、ほくらがしたんよ。すごいだろ？」と保護者に報告する姿も見られた。

自分たちの活動の成果を4歳児や保護者に報告していることから、子どもたちが達成感をもって活動を終えたことが分かる。また、自分だけではできないことが友達と一緒にできるという経験が友達への信頼や「自分だってできる」という自信（自尊感情の育ち）に繋がっていると感じた。

領域「人間関係」内容より

⑤ 友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。

「幼児期は、人とのかかわりの中で様々な出来事を通して、嬉しい、悔しい、悲しい、楽しいなどの多様な感情体験を味わうようになる時期である。幼

児は嬉しいときや悲しいとき、その気持ちに共感してくれる相手の存在が、大きな心の支えとなり、その相手との温かな感情のやり取りを基に、自分も友達の喜びや悲しみに心が向くようになっていく。²³⁾とある。友達とかかわって遊ぶ中で喜びや悲しみを共感し合うことが自分自身を肯定したり、相手の存在を認めたりすることにつながり、自尊感情を育んでいくと考える。

⑥ 友達のよさに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう。

「幼児は幼稚園での集団生活を通して、自分と異なる個性をもった友達と接し、次第に互いの心情や考え方などの特性に気づきながら、その特性に応じてかかわるようになっていく。そのためには、友達と様々な心を動かす出来事を共有し、互いの感じ方や考え方、行動の仕方などに関心を寄せ、それらが行き交うことを通して、それぞれの違いや多様性に気付いていくことが大切である。また、互いが認め合うことで、より生活が豊かになっていく体験を重ねることも必要である。」²⁴⁾とある。また、近藤(2010)は「基本的自尊感情を育むためには、共有体験をさせることが効果的であり、共有体験とは体験の共有と感情の共有を指す」²⁵⁾としている。自尊感情を育むためにはいろいろな感情や出来事を共有体験しながら、友達や自分のよさに気づき、互いに認め合う経験を積み重ねていく必要がある。

4) 4月26日「お豆ができたよ」

昨年度末から園庭の畑で育てていたグリーンピースを収穫し、子どもたちと一緒に皮むきをした。「先生、どうやったらむけるの？」とアヤが聞いたので「真ん中に指を入れてもいいし、端からすじを取るとむきやすいよ」と保育者がやって見せた。「やってみる」とアヤが皮むきに挑戦すると、その様子を見て他児も皮をむこうとする。豆が出てくるとそれぞれが口々に「大きいな」「いっぱい並んでる」と話し、全部むけると「できたな」「皮がいっぱい」と嬉しそうにした。保育者が「先生のお部屋まで運んで

もらえる？」と聞くとアヤが「じゃあ、みんなで行こうよ」とのこと。「よいしょ、よいしょ」とかけ声を合わせて運びながら「お豆ですよ」「私たちがむきました」「お豆はいりませんか？」とすれ違う幼児や保育者に話しかけていた。

水やりや草抜きをして、毎日大切にかかわってきた野菜の収穫は子どもたちにとって嬉しいものであるようだった。「よいしょ、よいしょ」と声を合わせて運ぶ姿から栽培、収穫を通しての満足感や自分たちが手をかけたものを大切にしようとする気持ちが窺える。また、「私たちがむきました」と周囲に知らせる姿からは「自分たちは誰かの役に立っている」という自己有能感が感じられる。

領域「環境」内容より

⑦ 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする。

「親しみやすい動植物に触れる機会をもたせるとともに、教師など周囲の人々が世話をする姿に接することを通して、次第に身近な動植物に親しみをもって接するようにし、実際に世話をすることによって、いたわったり、大切にしたりしようとする気持ちを育てることが大切である。」²⁶⁾とあるように、保育者の動植物へのかかわりの様子を参考にして、実際に植物に水をやったり、飼育動物の世話をしたりしながら命の大切さや尊さに触れることで、自分や自分以外のものを大切にしようとする心が育まれると考える。

5) 4月12日「当番表を作ろう」

白の画用紙に、色画用紙を切り貼りして自分の顔を作り、当番表を作ることにした。はさみを使うことに自信がないタロウは、顔用の画用紙を配ると、しばらくじっと画用紙を見て座っている。「タロウくん、画用紙いっぱいあるからな。欲しいときは、いつでも言ってね」と伝えたと「うん。わかった」と頷いた。

タロウは、慣れていないためか手首がうまく

使えず、丸を切ろうとすると、小さくなることが多い。タロウが最後まで切り取ることができるよう「いろんな顔の形があるからね。きれいな丸じゃなくてもいいよ。はさみはあまり動かさず、紙を持った手を少しずつ動かすといいよ」など、学級全体にも声をかけながら見守る。

タロウは、顔の形を切り取ると「こんなんでもいい？」と心配そうに聞いてきた。「その中に目や鼻や口が貼れると思ったら、大丈夫だと思うよ」と言う。「そうか」とタロウ。それから、黙々と目や鼻を作り、保育者が横を通ると「見て。いける？」と聞き、「いい感じと思うよ」と答えるにつっこりしながら最後まで作業を進めた。

製作に苦手意識があるタロウが、保育者との言葉や視線のやりとりにより安心感を感じながら、最後まで作業を続けることができた。まずは言葉で自分の思いを伝え、相手から応答される経験を積み重ねていくことが自信となり、自分でやろうとする力に繋がっていくと考える。

領域「言葉」内容より

⑧ したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。

「集団生活の中での人とのかわりを通して、幼児は、自分のしたいこと、相手にしてほしいこと、言葉による伝え方や、相手の合意を得ることの必要性を理解していく。」²⁷⁾ また、「幼児は幼稚園での集団生活を通して、自分の分からないことや知りたいことなどを、相手に分かる言葉で表現し、伝えることが必要であることを理解していく。」²⁸⁾ とあるように、幼児は集団生活の中で、言葉で伝え合うことの重要性を学んでいく。しかし、保育現場では自分の言動や行動全てに他者からの承認を得ようとする子どもの他、したいこと、してほしいことがあっても、我慢して言葉にすることができない子どもも見られる。保育者が、子どもの言葉を丁寧を受けとめ対応していくとともに、子どもが自分なりの言葉で表現しやすい雰囲気づくりをしたり、子ども同士が伝え合う仲立ちをしたりしていくことで、安心感をもつ

て言葉でのやりとりができるようになっていくと考える。また、したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりすることができるようになることで、子どもの活動範囲が広がり、経験の場を広げることに役立つと考える。

6) 10月30日「上手に描けたやろ？」

運動会での思い出を絵に描くことにした。不安そうな顔になる幼児もいたので、一緒にどんな場面があったかを思い出していくと「かけっこ」「ダンス」など、子どもたちが口々に伝えてくる。「かけっこ描きたい。でも難しい」とチヒロ。チヒロの前に出てきてもらい、自分の体がどうつながっているか確認する。「顔…首…体…手…足」と一緒に声を出して言いながら、体のつながりを個々で区切り、黒板に貼った画用紙に図形で描いていくと「簡単～」との声があがった。

タロウは「難しそうやったけど、簡単になったから描いてみるな」と言い、描き始める。しばらくすると「先生見て。出来きたよ。踊ってる」とタロウから声をかけてきたので「すごい。タロウくん、かっこいいな。手の指も描いてる。ぱちを持って踊ってるんやね。みんなに教えてあげていい？」と言いながら、他児に紹介する。タロウは恥ずかしそうにしながら小さな声で教師に「上手に描けたやろ？」と言い、笑った。

タロウの「上手に」という言葉から、まだ他者からの評価を意識していることが感じられたが、「先生、見て」と自分から声をかけた姿から、自分なりの表現に自信をもち満足していることが窺えた。4月の当番表の事例と比較すると、「自分は自分でいい」という自尊感情が育まれていることが感じられる。また、子ども自身が自分なりの表現を受け入れ楽しむことが、自由にかいたりつくったりする意欲に繋がっていくと考える。

領域「表現」内容より

⑨ 感じたこと、考えたことなどを音や動きで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。

「幼児は、感じたり、考えたりしたことをそのまま率直に表現することが多い。また、幼児は、感じたり、考えたりしたことを身振りや動作、顔の表情や声など自分の身体そのものの動きに託したり、音や色、形などを仲立ちにしたりするなどして、自分なりの方法で表現している。」²⁹⁾とある。園での日常生活の中で、子どもらしい表現に出会うことは多いが、自分のことを受け入れにくい子どもの場合、周囲の反応が気になって表現できなかったり、注目を集めるため過剰な表現になったりすることもある。また、予め決められたことはできても、自由にかいたり、つくったりするとなると、なかなか取りかかれず苦手意識を感じる子どもも見られる。子どもが自由に表現するためには、「自分は自分でいい」という自尊感情をもつことが必要である。

Ⅳ 研究のまとめと今後の課題

(1) 自尊感情を育む保育における留意点

- ① 幼児の自尊感情を育てていくためには、それにかかわる周囲の大人が自尊感情をもつことが必要であるということを知り、自分自身の自尊感情を大切にする。
- ② 幼児が居場所を感じ、ありのままの自分を出しことができるような学級の雰囲気づくりをする。
- ③ 結果だけではなく、幼児一人一人の活動の過程を認めていく。
- ④ 幼児と接する際には、ありのままの幼児の姿を受け止め、幼児の心の動きに沿った言葉かけを大切にする。
- ⑤ 生活の中に抱きしめる場面をつくり、一人一人とのスキンシップを欠かさずにとる。

(2) 自尊感情を育む保育における指標

- ① 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。(領域「健康」)
- ② 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。(領域「健康」)

③ 自分で考え、自分で行動する。(領域「人間関係」)

④ いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ。(領域「人間関係」)

⑤ 友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。(領域「人間関係」)

⑥ 友達のよさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。(領域「人間関係」)

⑦ 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。(領域「環境」)

⑧ したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。(領域「言葉」)

⑨ 感じたこと、考えたことなどを音や動きで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。(領域「表現」)

(3) 今後の課題

本研究では、先行研究及び幼稚園教育要領解説、幼稚園5歳児の実践事例より自尊感情を育む保育における5つの留意点と9つの指標をあげた。

保育者は、子どもとのかかわりにおける留意点と指標を意識して保育にあたることで、子どもの人格形成の基礎に携わっていること、保育者自身が子どもの自尊感情を育んでいるという自覚をもってほしいと考える。

今回あげた留意点と指標は、自尊感情を育む保育における仮説である。今後は、幼児の継続的な事例から、保育者が「自尊感情を育む保育における留意点と指標」を意識して保育にあたることで、子どもたちにどのような自尊感情の育ちが見られるかを検証していきたい。また、継続的な実践事例をもとに検証することは、保育者が留意点や指標をもって保育にあたるのが、子どもの自尊感情を育むことにどのように作用するかを明らかにするだけでなく、新たな仮説の発見にもつながるのではないかと考える。

《 引用・参考文献 》

- 1), 2) 文部科学省, 2008, 幼稚園教育要領解説:P 24
- 3) 中間玲子, 2007, 自尊感情の心理学, 児童心理 7 月号:P13-14
- 4), 5) 近藤卓, 2007, 生きる力を支える自尊感情, 児童心理 7 月号:P45-46
- 6), 7), 8) 園田雅代, 2007, 今の子どもたちは自分に誇りをもっているか, 児童心理 7 月号:P 2
- 9) 近藤卓, 2010, 自尊感情と共有体験の心理学ー理論・測定・実践初版, 金子書房:P21
- 10) 前掲書, 今の子どもたちは自分に誇りをもっているか, 児童心理 7 月号:P 3
- 11), 12), 13) 前掲書, 幼稚園教育要領解説:P204
- 14) 同上:P92
- 15) 塚崎京子・無藤隆2004, 保育者と子どものスキンシップと両者の人間関係との関連ー3歳児クラスの観察からー, 保育学研究第42巻第1号:P49
- 16) 前掲書, 幼稚園教育要領解説:P69
- 17), 18) 前掲書, 生きる力を支える自尊感情, 児童心理 7 月号:P46
- 19) 前掲書, 幼稚園教育要領解説:P71
- 20) 同上:P74
- 21) 同上:P92
- 22) 同上:P94
- 23) 同上:P96
- 24) 同上:P99
- 25) 前掲書, 自尊感情と共有体験の心理学ー理論・測定・実践初版, 金子書房:P 6
- 26) 前掲書, 幼稚園教育要領解説:P126
- 27), 28) 同上:P143
- 29) 同上:P163

抄 録

人格を形成していく最初の段階である幼児期において必要なのは、無条件に自分の存在を認める感情である基礎的な自尊感情をしっかりと育てていくことであると考え。幼稚園、保育所はほとんどの子どもにとって、集団生活を体験する初めての場所であり、その心身の成長発達を預かる保育者の役割は大きい。保育者が意識的に幼児の自尊感情を育てていこうとすることで、その育ちを確かなものとするのではないかと考える。

本研究では、幼児の自尊感情を育むために保育者に必要であると思われる留意点と、幼児の自尊感情の育ちを知るために必要となる指標について、先行研究及び幼稚園教育要領解説、幼稚園5歳児の実践事例より抽出する。

キーワード：保育者，自尊感情，留意点，指標